

分科会 D 議事録

テ ー マ：病院図書館と看護図書館の連携
日 時：平成22年5月29日（土）13：00～14：30
会 場：日本歯科大学 4階講堂
参 加 者：85名
座 長：河合富士美（聖路加国際病院教育・研究センター医学図書館）
話題提供者：中木高夫（日本赤十字看護大学）
 及川はるみ（聖路加国際病院教育・研究センター医学図書館）
 佐藤晋巨（聖路加看護大学図書館）
 石川道子（元るかなび・川鉄千葉病院看護専門学校非常勤講師）
 根岸准子（日本看護協会看護教育センター図書館）
記 録：加藤恵子（国立がん研究センター図書館）

要 旨：

病院図書館や看護図書館は、小規模館が多く協力しあうことで大きなメリットが得られる可能性がある。制約も多い中、利用者教育等の実践例を通して、連携の方法、効果、限界について理解を深めていきたい。

話題提供1 「看護師はエビデンスをどこで得ればよいのか？」（中木）

現在の医学図書館では EBM が最重要な話題である。EBM とは Sackett の定義によると「ひとりひとりの患者のケアに関する意思決定を行うのに際して、最新で最善の根拠を、細心の注意を込めて、あいまいさをひとつも残さず、賢明に使用すること」とある。これを EBN (Evidence-Based-Nursing 根拠に基づく看護) と合わせて EBP (Evidence-Based-Practice 根拠に基づく実践) と考える。

病院勤務の看護師が EBP を行う場合、改善すべき対象業務を明らかにし、そのことに関する文献をできるだけ多く入手し検討することが必要であり、そのためには必要論文が入手可能であることが最重要である。しかしながら、病院で働く看護師が必要な文献を入手するのは容易ではない。自身で購入する、病棟で共同購入する、看護管理部門の本を利用する、病院図書室を利用する、母校の図書室や近所の看護大学図書館を利用するなどの方法が考えられるが、それぞれ問題が多い。図書館は、予算の制約、新刊中心の出版などにより、広範囲の分野にまたがった EBP の必要文献が入手しづらい環境にある。またいずれの場合もコピーの著作権の問題を抱えている。

日本看護図書館協会（JNLA）の元会長としての立場で、看護図書館は情報拠点であると考え。全国の看護系大学、短期大学、専門学校、そして病院図書館がネットワークを作り、検索された文献を融通しあうことで情報の偏在をカバーできる。看護図書館は予

算的に厳しく、司書どころか専任職員もない図書館もある。現代の医療を支える図書館として十分な機能を備えているかを、認証評価する機構が必要である。まずは看護図書館の最低基準を設けることから始めたい。

病院で働く看護師は、病院図書室にあるインターネット文献検索データベースで検索を行い、必要文献を病院図書室の司書に ILL (相互貸借) で取り寄せてもらうというのが、「看護師はエビデンスをどこで得ればよいのか？」の回答である。

つまり NACISS-ILL に入ることが必要である。

Q: 日本医学図書館協会(JMLA)の会員館は、なかなか JNLA に入ってくれないというが、国立N大学 (話題提供者が所属していた) はそもそも JMLA にも入っていない。

A: (中木) 滋賀医科大学に聞いたところ、JMLA 会費について、支出できる項目がないと言われた。すでに国立N大学は退会しているので詳細は不明だが、独法化の時、これにひっかかったのではないだろうか。いっぼう、JNLA に入るとどのようなメリットがあるかとよく質問される。これから考えていきたい

A: (河合) どんなメリットがあるのかという質問は、JMLA でもよく聞かれることである。

話題提供 2 「法人格の異なる類縁施設間の連携」(及川・佐藤)

学校法人聖路加看護大学と財団法人聖路加国際病院は、戦後法人格が分かれ2つの組織となった。理事長は一緒であるが、建物、雇用は別々で、所管も厚生労働省と文部科学省に分かれている。

それぞれの図書館同士の連携の問題点としては、館種別による要求優先度の違い、システム上で切り離されている点、大学は寄付金や助成金の使途が限定されること (別組織の病院のために使いにくい)、親組織の理解を得るなどがあげられる。

実際の連携は、2004年に協力規定を結び、病院図書館が、看護大学図書館の近くに移転したことから始まった。病院図書館と、看護大学図書館の建物の間には橋がかかっており、それを両方から利用できるよう、事務方を含め話し合いがもたれた。実際に橋が開通した2006年から libil (聖路加国際病院図書館—看護大学図書館連携プロジェクト) と呼称を決めて、連携を始めた。

連携のコンセプトは、「それぞれの利用者にとって役立つ図書館になる」ということである。しかし、病院図書館は臨床に従事する看護職、看護大学図書館は学部生・院生が多いなど、利用者の違い、病院のセキュリティが厳しくデータの共有ができないこと、大学助成金の使途が限定されている点、新しいものが重要で ILL 重視の病院図書館と、学習優先で古いものも必要な看護図書館というような機能に求める優先度の違いがあり、また、マンパワーもなるべく外注したい病院と、カスタマイズで行いたい大学というように、連携にはなかなか難しいものがある。

リテラシー教育に関しては、連携がうまく行われている。病院にはパソコン演習を実施

できる場所がないこともあり、看護大学で、病院図書館スタッフも講師として加わりスタートした。現在は、年間計画を立てて一緒に行っている。講師は担当を決めてそれ以外にスタッフが各1~2名参加し、質問にすぐ答えられるようにしている。3年間で471人が参加し満足度も8割と評判も良い。

聖路加国際病院と聖路加看護大学という、近い関係の図書館同士の連携とはいえ、図書館外の協力が必要なこと、法律や契約の遵守、組織内の様々な決まり、金銭的問題が障害となり、連携不足の場合が数多くある。図書館レベルでできることは、マンパワーの有効活用、雑誌のバックナンバーや寄贈資料等のゆるやかな分担収集、システム導入の際の情報収集などで、そういうことが、利用者満足や利用者能力の向上、図書館員の能力の向上、ひいては日本の医療に貢献できるのではと考える。

話題提供3「看護学生が看護師になるために一看護学校と病院図書室との連携による文献検索授業」(石川)

川鉄千葉病院看護専門学校の図書館は、話題提供者が来るまでは無人の図書室で、書架の節約のため、図書を大きさに順に並べるなど、学生はどうやって本を探していたのか疑問に思える状態であった。週2日の勤務では、時間が全く足りず、教員、学生と連携して業務を行っている。NLM分類もよく理解せず行っていたため、データ作りからやりなおさなくてはと考えているところである。

そんな中、「看護学生に文献の探し方を教えてほしい」との依頼があった。川鉄千葉病院図書室の奥出さんと協力して、3年前から2学年の30名に3回6時間の文献検索授業を始めたところである。内容は、1回：看護文献の状況 情報の評価、2回：医学看護学雑誌文献データベース・病院図書室紹介、3回：演習と講評・感想とアンケートとなっている。1回目では、インターネットの普及とともに、ネット検索だけで必要なものは入手できるとの考えが初学者に蔓延しており、質のよいものと悪いものの判別など、質の評価の話、2回目は、病院図書室の基本機能とデータベースについて、3回目はキーワード検索とその講評を行いアンケートも実施した。それによると、全体的にまだまだ理解が足りず、特にOPACの使い方、キーワード決め方と絞り込み、文献の入手方法について良くわかっていないことが顕著であった。病院図書室の利用法も良くわかっていないようで、これは、図書室の現場できちんと見せて説明する必要があると思っている。現在「看護研究の文献検討」を担当してほしいという話があり、オリエンテーションの後、課題を出してそれを発表してもらい講評するという事を考えている。

話題提供4「看護実践の場に必要情報サポート」(根岸)

日本看護協会は、平成20年度末に会員62万人を数える。すなわちサービス対象者も62万人ということになる。実際の来館者は年間1万人ほどである。「すべての会員に図書館資料を、すべての図書館資料に会員を、利用者である会員の時間を大切に」ということで、

コツコツ積み上げてきた、最新看護索引というデータベースによる情報サポートを紹介したい。

最新看護索引 Web は日本看護協会が作成、編集しているデータベースで、文献数は4月で183,177件ある。1989年に索引誌87年版を出版し、2007年3月に会員向けにWeb版の提供を開始した。2009年には、看護系の大学や図書館から要望があり、凸版印刷のコンテンツ配信サービス、ライブラリープラスを利用し、有料公開を行っている。

最新看護索引 Web は、看護分野に特化した、看護文献メインのデータベースである。医中誌 Web や JMEDPlus より件数は少ないが、看護文献を検索する際、看護で絞り込む必要がなく、キーワードも看護用語を中心に採用しており、初心者には利用しやすいと思われる。検索画面は、Google に似た簡易検索と条件検索の2画面で構成されている。Web 化にあたって、予算的な面で、高度なシステムは組めないということもあるが、検索の初心者から中級者を対象としている。

収録対象は当館の所蔵雑誌で、看護協会の会員は複写、閲覧の申し込みが可能である。利用は2009年が総アクセス1,063,000回。5月～11月が多く、6月がピークである。これは、認定看護師の教育課程や、秋の学会に向けての準備が、関係していると思われる。1日のうちでは、日中のアクセスが多いのはもちろんであるが、23時前後、3時～4時ころにも10,000回のアクセスがあり、自宅やナースステーションからも利用しているようだ。

文献複写依頼は1980年には860件くらいであったが、最新看護索引のWeb 申込ができるようになった2007年には10,000件を超え、2008年には15,000件になった。機関向けに公開した2009年には、予想に反して14,000件と減少した。やはり機関は看護文献を入手する環境が整っているようである。文献複写は当館所蔵の資料であること、書誌情報に間違いがないことなどにより、滞りなく行われている。身近に利用できる図書館のない看護師にとっては、時間節約に大きなメリットがあると思われる。最新看護索引を通して、実践の場に必要情報を届けるサポートを行っているが、利用者にとって使いやすい仕組み作りというのが必要だということを実感した。

文献複写依頼の数が示すように、看護職の文献ニーズは非常に高い。それぞれの病院図書館の取り組み次第によって、より利用が広がっていくと思われる。

Q: 川鉄千葉病院看護専門学校の連携先である、川鉄千葉病院図書室の奥出さんのコメントを伺いたい

A: (奥出) 看護学校の現状がよく理解していただけたと思う。石川さんが来るまでは、2年間に1度数時間、突然頼まれて授業を行うといった程度で、連携といえるようなものではなかった。今回石川さんが看護学校にきてくれて、これから少しずつ2人で話し合っ、そんな立派な連携ではないけれど、人対人の連携という感じでやっていけるのではないかと考えている。同様の図書室の参考になればと思って、今回石川さんをお願いした。

Q: 中木先生の「看護評価機構」というのは具体的にはどのように進んでいくのか

A: (中木) 将来構想委員長 (国際医療福祉大学 今田敬子氏) がいるので、お答えいただきたい

A: (今田) 将来構想ではなく、JNLA の組織検討委員会をこの4月に立ちあげたところである。組織検討の1番の眼目は、理事の数とかクリミティブなところであるが、2年目くらいに中木先生懸案の認証についてやれたらなと思っている。病院機能評価をやり始めたころ、働きかけによって病院機能評価の項目に図書室の有無を入れたため、機能評価を受けるから図書室を作るという実例があった。今はかなり形骸化してしまっているが、組織をそういう風にすることによって、グレードアップすることはあるので、そこは意識をして、進めていきたいとは思っている。今は病院図書館も看護図書館も力がなくなっているが、元々小さいところが発言するには、力を合わせていかななくてはいけない。日本は外圧とか上からというのに弱いので、それをどれだけ使えるかということである。文部科学省に対して、あきらめず力を合わせてできたらと思う。

A: (河合) 先ほど、国立N大学がJMLAを脱退してしまったという話があったが、どこの団体も会員の確保と組織の運営に非常に苦労している。たとえばJMLAは薬学図書館協義会と合同でコンソーシアムを組んだりとか、研修会を合同開催したりしているので、今度ぜひJNLAともそういった合同の検討ができないか、いろいろな陳情も合同でできたら、もう少し力を持って当たれるのではないかと個人的に思っている。

Q: (河合) 今日、発言のなかった聖路加看護大学図書館の佐藤さんに、協会関係でなくてもかまわないので、一言お願いしたい。

A: (佐藤) 聖路加看護大学図書館では、個別の文献検索相談というのを受け付けている。大学院生、学部生から自分のテーマで検索をしたい、網羅的に検索をするにはどうしたらいいのか、テーマを絞り込むにはどうしたらいいかなどの相談がある。そういう時に気付くのは、データベースは押せばなんとかなるので、わかったつもりで検索していた人が多いということである。これを何とかしなくてはと考えていたところに連携の話があった。1対多数でやると効率も良く、ある程度のレベルまではそこで達してくれるので、個別相談も理解が深まることになる。看護大学図書館は、学習・研究が中心で、卒業してから臨床の場で検索するにはどうしたらいいかという点ではサポートができない。連携によって病院図書館の司書の方から、「PubMed」の使い方といった授業が受けられるのは、学生にとってメリットがあったと感じている。

A: (河合) 同じ聖路加という名前でもトップも同じであり、スムーズに連携できたと思われるだろうが、事務方は全く別なので、セキュリティ面、学生の安全性などでかなり難航した面もあった。上の意向と現場の協力でうまく進んできて良かったと思っている。隣同志の連携でも、いろいろ問題があったので、まして、場所が離れている場合、組織的繋がりはないが場所が近いなどで連携しようとした場合など、もっと多くの障害があるとは思いますが、小さなところは助け合って、大きな力を持つよう努力するのが、これからの図書館にとって必要なのではと考えている。